様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３５４１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３８９３

研究課題名（和文）ストレングス‐パワー変容を志向した相談援助実習指導・現場実習教育方法の研究

研究課題名（英文）Research about the method of social work practical education oriented the changing process between strengths and power of students

研究代表者
山口　真里（Yamaguchi, Mari）

広島国際大学・健康科学部・准教授

研究者番号：７０４４１５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究成果は、①ストレングス、パワー、コンピテンス、コンピテンシーの関係性の整理、②実習における実習生のストレングス－パワー変容過程の仮説の提示、に取り組んできたことである。①については、ストレングスやパワーだけでなく、コンピテンスやコンピテンシーの概念に着目し整理した。また②については、①の整理もふまえて、スーパービジョンや省察的実践に関わる先行研究の整理を通じて取り組んだ。また最終年度は、他の研究者と共に、新しい社会福祉士養成カリキュラムの実習教育におけるグループワークの位置づけを再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
継続研究の中で、学生が自らにストレングス視点を向けて成功体験を積み上げていく教育方法への関心が高いこと、学生自らのエンパワメント体験が支援対象のエンパワメントの意義の実感につながること、などを理解した。しかし学生のエンパワメント体験とソーシャルワーク実践能力としてのコンピテンスやコンピテンシーとを結びつけて言及した研究は少ない。そこで本研究は、相談援助実習指導・実習教育を通じて学生のストレングスをソーシャルワーク実践能力として変容させる過程展開方法を模索したことに意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are (1) organizing the relationship between strengths, power, competence and competency, (2) suggestion of the changing process between strengths and power of students in social work practical education.
For(1), not only strengths and power, but also the concepts of competence and competency were focused and organized. As for (2), based on the arrangement of (1), I engaged to research about supervision and reflective practice. Also, in the final year, I reconsidered the positioning of group work in the social work practical education for the new training curriculum for students, together with other researchers.

研究分野：社会福祉学

キーワード：相談援助実習指導・実習　ストレングス－パワー変容過程　コンピテンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

私立大学の社会福祉士養成課程の講義や演習、実習、ゼミ、卒業論文指導などの教育経験や、学科内の実習委員や教務委員を担当した経験から、学生が挫折体験による自信のなさや、学力への不安からくる劣等感を抱えていることを知った。その背景には、いわゆる大学全入学時代である現状や多様な入試形態で入学したことで、学力に自信のない学生も多いことが挙げられる。また相談援助実習指導の個別面談をつうじ、彼らの関心や希望、長所を実習計画に結び付けることで、福祉現場への関心や動機づけがより高まることや、相談援助実習での利用者や実習指導者との出会いや巡回指導・帰校日指導により、ソーシャルワークへの関心だけでなくその学びへの動機づけを強めたり、実践者として成長していく様子を目の当たりにした。この体験から、彼らが劣等感や挫折感を抱えるからこそ、生活問題に直面した人に共感し寄り添い支援する意義を実感できるのではないか、そして彼らがソーシャルワーク実践を行う力や可能性、すなわちストレングスを持っているのではないかと考えるようになった。さらに彼らがソーシャルワーカーになるためには、その養成課程でエンパワメントを体験し、自信をもって実践に臨めるように教育を行う必要があると考えるようになったのである。

先行研究においても、例えば保正友子（2002）は「ソーシャルワーカー自身がエンパワーメントとはどのようなことなのかを、自らの体験として実感すること」[1)]が重要であると捉え、エンパワメント志向の演習の実践を提唱している。また保正（2000）は、「学生は強さ、能力、固有の経験を持った学習の主体者であり、教師は学生との関わりを通して、共に現実を探求していく共働者」[2)]と捉え、当事者のエンパワメントにつながる学生自身のエンパワメントを図ることを強調している。このように、ソーシャルワーカーの養成課程における学生のエンパワメント体験の必要性が高まっていることがわかる。ソーシャルワーカーは社会的な困難に直面し、パワーレスな状態にある利用者が主体的に生活を立て直していけるよう促進するエンパワメント実践を行わなければならない。そのためには、ソーシャルワーカー自身が自らの強さを認識し、自信を獲得する体験を積み、その重要性を実感することが必要である。学生たちがソーシャルワーカー教育でそうした実感を得ることは、将来エンパワメント実践を行ううえでも重要な課題といえよう。

またもともと筆者は、利用者のストレングスに着目し、問題を解決するパワーへと変容させる過程（ストレングス‐パワー変容過程）展開方法の研究を継続している。具体的にストレングス‐パワー変容過程とは、ストレングスに着目した支援過程展開として、利用者が培ってきたストレングスを利用者自身が他者や周りに影響を与え、行動を起こしていくパワーに変容させる過程のことである。ストレングス‐パワー変容過程の提示は、既に京都府立大学大学院博士論文研究「ソーシャルワーク実践におけるストレングス‐パワー変容過程の構築」にて行っている（図１参照）。こうした継続研究の発想をもとに、学生のストレングスに着目し、それを実践能力に結び付ける過程を展開する方法に関心をもち、確立したいと考えるようになった。また昨今の相談援助実習では、橋本有理子ら（2015）は「多様な特性をもつ実習生が増える一方で、限られた実習時間のもと、実習生は実践的視点を理解し、能動的に行動できるかが求められている」[3)]とその課題を指摘している。日本のソーシャルワーカーである社会福祉士を養成する教育では専門職としての実践能力を測る概念としてコンピテンシー（competency）を導入し、相談援助演習や相談実習指導、相談援助実習でコンピテンシーの獲得にむけた教育の効果が上げられているか評価を行う試みやその導入が行われている[4)]。

このように社会福祉士養成課程では、ソーシャルワーカーとして学生がエンパワメント体験をすることや実践能力を高めることが課題となってきている。

２．研究の目的

本研究では、相談援助実習指導・現場実習で実習生個人のストレングスに着目し、それをコンピテンシーとしての実践能力と結び付け、実習で発揮していく過程展開を教育方法としてとらえ、提示する。例えば人に教えることが好きな学生には、実習施設機関におけるソーシャルワーカーのエデュケーター機能への関心に結び付け、相談援助実習への自信を強めたり、動機づけを高めたりする。また実習での実践をつうじ、ソーシャルワーカーの技能として能力を高めていけるよう支援を行う。本研究では、こうした過程を学生のストレングス‐パワー変容過程とし、過程局面とそれを展開する教育実践方法の手続きを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、以下の６点を研究開始当初の課題とした。

（１）先行研究を通じたストレングス、パワー、コンピテンス、コンピテンシーなどの関連概念の整理

（２）相談援助実習指導・現場実習の担当教員へのヒアリング調査の準備と実施

（３）相談援助実習指導・現場実習受講生のストレングス-パワー変容過程とその展開方法の

試案の提示
（４）相談援助実習指導・現場実習受講生のストレングス-パワー変容を志向した教育実践
（５）受講生へのアンケート調査やヒアリング調査の準備・実施・分析
（６）受講生のストレングス-パワー変容過程とそれを展開する教育方法の精緻化と提示

４．研究成果

本研究の目的は、学生のストレングス-パワー変容を志向した教育の過程を明らかにし、それを展開する教育方法を提示することであった。しかし本研究期間中は、西日本豪雨災害や新型コロナウイルス感染症感染拡大などの災禍が相次いだ。そのため本研究は、研究の中断や学会への参加中止、相談援助実習指導・相談援助実習担当教員へのヒアリング調査実施の中止などの影響を受け、当初の研究計画より大幅に縮小して実施せざるを得なかった。さらに 2021 年度から社会福祉士養成課程の新カリキュラムがスタートしたことにより、本研究開始当初は「相談援助実習指導」「相談援助実習」であった実習関連科目の名称は、「ソーシャルワーク実習指導」「ソーシャルワーク実習（専門）」へと変更となった。科目名称だけでなく、実習時間数の増加や種別を分けた複数の実習施設･機関での実施など､実習内容にも大きな変更があった｡所属大学では、今年度より複数の年次にまたがる新しい社会福祉士養成カリキュラムに基づく実習が始まったため、新たな実習指導の講義や実習に係わる準備や実施、実習先との連絡・調整作業等に従事した。こうした実習指導・実習の変更は、本研究の内容や進捗状況にも大きな影響を与えた。

そのため現時点で本研究は、「３．研究の方法」で示した６つの研究課題のうち（１）先行研究を通じたストレングス、パワー、コンピテンス、コンピテンシーなどの関連概念の整理、（２）相談援助実習指導・現場実習の担当教員へのヒアリング調査の準備と実施、（３）相談援助実習指導・現場実習受講生のストレングス-パワー変容過程とその展開方法の試案の提示、の途上にある。特に本研究の成果としては、①ストレングス、パワー、コンピテンス、コンピテンシーの関係性の整理、②実習における実習生のストレングス－パワー変容過程の仮説の提示、に取り組んできたことが挙げられる。

まず①ストレングス、パワー、コンピテンス、コンピテンシーの関係性の整理については、ストレングス、パワー、エンパワメント、コンピテンス、コンピテンシーに関する先行研究を行った。特に経営学、心理学、教育学でも世界的に着目されているコンピテンスに着目した。ソーシャルワーク教育においては、コンピテンスはソーシャルワーカーとしての専門的力量と捉えられ、相談援助実習指導・実習では学生の学習の到達度や実践力としても理解されている。しかしソーシャルワークにおいては、コンピテンスは広く生活体験のなかで培われた適応する力とも捉えられており、学生のコンピテンスについてもこうした捉え方が必要であると考えられる。なぜなら学生も生活を営んできた存在であり、その体験のなかで多様な力をもつ存在だからである。すなわち学生の生活の延長上に専門職教育があり、彼らの生活状況を知り文脈を理解しないことには、専門的力量としてのコンピテンスを推し量ることはできない。さらに言えば、学生たちが自らの生活体験で得たコンピテンスを認識し、その重要性を実感することは、将来彼らがエンパワメント実践を行う力を育てるうえでも重要な課題といえよう。生活者である学生のコンピテンスを涵養し実践へと結び付けていくこと、またそこから彼らの可能性に思いを馳せ、主体的な学びへと生かしていくことは、学生自身のエンパワメントにもつながる。そしてエンパワメント体験を学生の実践へ反映させていくことができる教育の過程が実習スーパービジョンに求められている。そのため、学生のストレングスとパワー、コンピテンスの関係性を読み解き、学生のストレングスをコンピテンスへとつなげ、涵養する教育方法の模索が今後の課題であると考えられる。

また実習生のコンピテンスについては、他の研究者と共同で、実習生（他の研究者の所属大学の学生）へのグループインタビューをもとに、論文をまとめた。グループインタビューでは、実習生が実習体験を大学で学んできた理論と結び付けて語っていること、実習を通じて将来のソーシャルワーカー像や進路を具体化することができていること、そのほか相談援助実習指導・相談援助実習の教育課題が明らかになった。また相談援助実習前・中・後の教育をつうじて、実習生が専門職としてのコンピテンシーと生活者としてのコンピテンスを培っていることがわかった。さらに論文では、実習生が実習体験を振り返り、意味づけできる語りをするためには、実習生の文脈を理解しながら教員が語りを促すかかわりを行うプロセスが重要であることを強調した。

次に②実習における実習生のストレングス－パワー変容過程の仮説の提示については、相談援助実習指導・相談援助実習担当教員へのヒアリング調査の準備を行った。そこでは、まず実習生の実習前・実習中・実習後の過程とストレングス‐パワー変容過程を照らし合わせた。具体的には、実習前・実習中・実習後の教育 内容をストレングス‐パワー変容過程の「ストレングスの意識化」「ストレングスの焦点化」「ストレングスの行動化（パワーへの変容・発揮）」「パワーの確 認・評価」「パワーの維持・移行」の局面に置き換えて、そこでの教員と実習生の関わりについて考察した。また、実習前・中・後の教員から実習生へのストレングスを意識した働きかけについてヒアリングできるように質問項目ほか同意書や誓約書等の調査関連書類を作成し、所属大学に倫理審査申請を行った。

そのうえで、相談援助実習指導・相談援助実習担当教員へのヒアリング調査の実施に取り組ん

だ。しかし西日本豪雨災害や新型コロナウイルス感染症感染拡大、社会福祉士養成課程の教育カリキュラムの改正等の影響を受け、研究期間中に相談援助実習指導・相談援助実習担当教員２名のヒアリング調査しか実施できず、十分な実践研究ができていない。しかし２名の教員への調査では、実習前については、「実習計画書の作成時の個別面談の場面で、実習生が本人の希望や強み、社会経験などのストレングスについて語ることがある。そうしたストレングスを実習計画や実習に活かそうと努めている」との回答があった。また実習中の巡回指導や帰校日指導で、実習生はできていないことばかり語りがちであるが、教員が実習中にできていることを本人や実習指導者と確認したり、実習生が講義での学びと実習体験をつなげて考察したりできるよう指導していることも理解できた。さらに実習後は、専門職としての課題を明らかにする一方で、実習で達成できたことや実習生のもつ力量についても自覚できるよう促しているということも明らかとなった。調査結果からは、１）相談援助実習指導の開講年次や相談援助実習の開講年次など各大学における教育カリキュラムが実習生との信頼関係の構築や実習へのモチベーションに影響を与える可能性があること、２）実習生の個別状況のアセスメントについては、実習指導担当教員が会議や個別面談で行っていること、などが理解できた。

また本研究では、実習教育におけるスーパービジョンや省察的実践についても先行研究の整理を通じて取り組んだ。さらに他の研究者と共に、新しい社会福祉士養成カリキュラムにおけるグループワークの位置づけを再考した。新カリキュラムでは、地域共生社会の実現を目指し、そこに寄与できるソーシャルワーカー養成が強調されている。実習においても、利用者や家族、グルー プ、地域住民、多職種・多機関との連携・協働を実現できる教育が求められていることが明らかとなった。そして実習においても、グループワーク理論を意識した教育が必要であることを強調した。

このように本研究は、災害や感染症感染拡大等により研究環境が大きく変化したことにより、十分に成果が上げられていない面がある。しかしこれまで示してきたような本研究成果を生かしながら、社会福祉士養成課程の実習教育における実習生のストレングス-パワー変容過程を展開する教育方法について継続して考察していきたい。

１）保正友子（2002)「学生のエンパワーメントを促す社会福祉援助技術演習の検討」『ソーシャルワーク研究』Vol.28 No.3　相川書房　50.
２）保正友子（2000)「エンパワーメント志向のソーシャルワーク教育についての考察・序論」『埼玉純真女子短期大学研究紀要』16　埼玉純真女子短期大学　31.
３）橋本有理子ほか（2015)「コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の学修の現状と今後の展望―コンピテンシーシートを用いた実習生による自己評価の結果をふまえて―」『関西福祉科学大学紀要』19　関西福祉科学大学　60.
４)以下の文献は、コンピテンシーを実習教育に取り入れる試みや導入に関する先行研究である。
・池田雅子（2005)「社会福祉実習教育における学生の自己コンピテンス・アセスメントの活用について―コンピテンス評価結果の分析を通して―」『北星論集』42　北星学園大学社会福祉学部　49-65.
・添田正揮（2009)「第 8 章　実習指導方法論・Ⅳ 実習教育評価」日本社会福祉士養成校協会編『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版　235-272.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 加藤由衣・山口真里・西梅幸治	４．巻 9
２．論文標題 ソーシャルワーク実習教育における学生のコンピテンス涵養の意義と課題 ―実習を経験した学生へのグループインタビューの分析から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国・四国社会福祉研究	６．最初と最後の頁 17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 山口真里・加藤由衣・西梅幸治	４．巻 14
２．論文標題 コンピテンスを涵養する実習スーパービジョン　―ソーシャルワーク教育におけるコンピテンス概念の検討をとおしてー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 広島国際大学医療福祉学部紀要	６．最初と最後の頁 29-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 山口真里・加藤由衣・西梅幸治	４．巻 19
２．論文標題 ソーシャルワーク教育におけるグループワークの再考 ―2021年度からの新カリキュラムに焦点化して ―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 広島国際大学医療福祉学科紀要	６．最初と最後の頁 公開作業中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山口真里・西梅幸治・加藤由衣
２．発表標題 ソーシャルワーク教育における実習スーパービジョンの方法と課題 ―スーパービジョン過程での省察に焦点を当てて―
３．学会等名 日本社会福祉学会 中国・四国地域ブロック 第51回 高知大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関